



ハムド
メイ
お守り

豆ヒヨコ

著作権者：MPF
ライセンス：CC BY-SA 3.0
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Taxus_wood.jpg

静脈の浮いた手をガサガサいうビニール袋に突っ込み、柿の種を一つかみ取り、顔面にぶつけるようにして頬張った。おばあちゃんはそうして駄菓子をむさぼりながら、体を細かく揺すり続ける。自発的に揺すっているのではなく、じっと動きを止めておくだけの体力が残っていないのかもしれない。テレビ画面の光に照らされて、しわだらけの顔が虹のように色づく。

「じゃあ、おばあちゃん、私むこうに行くね。またね」

声をかけたが返事はなかった。ちらっとこちらを見ることもしない。こぶし一杯分の柿の種を、彼女はまだまだ口に放り込み続けている。

六畳の和室には、洗われた衣類と汚れた衣類が別の山を築き、古びた雑誌や新聞が大量にばらまかれていた。世話をしている克子おばさんによれば、服も本も、なぜか家じゅうからかき集めてきてしまうという。ワンピースタイプの部屋着は、もとの色が分からないくらいに古びてぼろぼろだ。湿ってすえた臭いが、ごまかしようもなく薄っすらとただよっていた。

悲しくなってはいけない。

強く自分に言い聞かせる。人はみな老いるのだから。

私が小学生のころ、おばあちゃんは身だしなみを最優先する人だった。おしゃれが大好きで、手に入る限りの最新アイテムを駆使し、婦人雑誌から抜け出たマダムのような装いを心がけていた。オーダーメイドのツーピース、きっちり塗られたフレンチネイル、十は若く見えるしわの少ない肌。私のスニーカーが埃じみているのを目ざとく見つけ、まめに洗いなさいときつく叱られたこともある。

今はもう、テレビと柿の種しか見ていない。

もう一度挨拶をしてから、私はドアをひとつ開けて細い廊下を歩き、仏間に戻った。

宴会のごちそうは大方食べつくされ、集まった面々はすでに飲酒へと軸足を移していた。克子おばさんはカセットコンロの土鍋に材料を追加しているところで、それを隆文おじさんが、何をするでもなく覗き込んでいた。

おなかの空いていた私は、吸い寄せられるようにその隣へ座る。

「どうだった？」

たばこの紙箱をライターでとんとん叩きながら、隆文おじさんが聞いた。

「全然だめ。反応なしだったよ。私が誰かも、きっと分かってないと思う」

つとめて明るく答えた。すこし離れた長机から、取り皿と両端が細まった箸をもらう。鶏肉が煮えてからねと釘を刺しつつ、克子おばさんは大きなため息をついた。

「本当に、病状がだいぶ進んでしまっ」

「すごい勢いでお菓子を食べるんだね」

「止めさせたいんだけど、あれしか食べないのよ。入れ歯のくせにすごいと思うわ。不思議なことに血液検査の数値も悪くならないの、どうなってるんだか」

隆文おじさんが、ビール用の小さなコップを差し出してくれる。

「ひらりちゃん、かけつけ一杯」

私は軽く頭をさげながらそれを受け取った。黒い瓶から少しだけ注いでもらい、おじさんのコップにもご返杯をする。口をつけると、苦く小さな泡がぷちぷちと弾け、舌に心地いい。隣のテーブルから、酔いに増幅された笑い声が響いた。

「でも徘徊はしないんだよ。トイレも一人で行ける。ただ無気力で、ときどき少しばかり暴力的になるくらいなんだな」

「暴力的？」

「昔のことを思い出したときとか、荒れてしまうようだね」

土鍋の湯気を鬱陶しそうに払い、克子おばさんも言う。

「父さんの浮気やら賭け事やら、過去のトラウマには事欠かない人だから。可愛そうだけど、こっちは大変」

私はちびちびと、泡だけを舐めるようにすすった。

「まあ、今日は薬も強い方を飲んでるし、何も起きないさ」

強い薬？ 初耳だ。けげんそうな私を見て、おじさんはあわてて話題を変える。

「ところで芽衣子さんは？ 重行さんは仕事かな」

「そうそう！ なあに一。重行さんはまだしも、芽衣子まで来れないなんて。お盆なのよ」

公務員も近頃はこき使われるみたいで。へらへら笑いながら流すと、克子おばさんは疑ぐり深そうに、太くアイラインを引いた目でグッと睨んだ。

もちろん嘘である。父は確かに海外出張だが、母は「やることないのよね」とぼやきながら無理やり職場へ出て行った。電話番号の同僚とそばを食べる予定らしい。母は、生まれ育ったこの家を嫌っている。

今日はお盆を名目とした、相沢家あげての納涼会だ。気前よくお酒がふるまわれ、奥様方が腕によりをかけたお惣菜も、テーブルに所狭しと並んでいた。このあたりの人々は、とにもかくにも宴が好きらしい。誰かが生まれたといえやお七夜にお食い初め、死んだといえ何日もお弔い、一人につき何十年も繰り返される法事、夏休みと年末には大宴会。飲むためだけに日々生きていると言わんばかりの、陽気なおじさん・おばさんたち。核家族で育った私には、家の中にお祭りのような興奮があるのは珍しく、かつ面白かった。

都心から四時間ほど車を走らせた山あいには、おばあちゃんの家はある。水のきれいなことが自慢で、若干の特産品と薬品会社の大規模工場が支えで、過疎化がひしひしと深刻度を増しているような、要するに目立たない地方の町だ。克子おばさん夫婦をはじめ、母方の身内はその多くがこの町のどこか、あるいはごく近いエリアで集うように暮らしている。

田舎は土地が安くて住まいがどデカくなりがちだけれど、この家は特に広くて大きい。もともとは庄屋で、戦後には副町長を勤めるものも出たりと、地域一帯のまとめ役を自負する家柄だった。まあそんな名声も、やらかすだけやらかして財産を食いつぶしたおじいちゃんのせいで、今や地に落ちてしまったわけなのだが。

私はここが嫌いじゃない。都会育ちの私は、ここでしかたっぶりの自然を味わえないから。健

康食品のチラシを制作するアルバイトは、綴られたうたい文句とは裏腹に、生命力を削る仕事だ
と思う。三か月にいっぺんくらいの割合で、満員電車と顧客クレームを根こそぎ頭から追い出し
たくなるのだ。切実に。

複雑な感情がうごめく親戚づきあいも、私の代にもなると所詮よそ者なので、聞き流しておけ
ば大した害はない。一人旅気分が幾度か訪れているうちに、いつのまにか盆暮れ正月まで、私だ
けが来ればいいようになってしまった。

いったん席をはずし、挨拶がてらお土産を配って回った。おう、元気してたか！ はやく結婚
しなさいよー。めいちゃん来てないの？ 病気？ お前まだフリーターやってんのか親不孝
だな……みんな酔っぱらっているためか遠慮がない。気にはしないけれど、親戚って確かに面倒
だと思う。家族ほど親身ではないくせに、文句は家族レベルに言ってしまうあたりが。

「ひらりちゃん、長旅お疲れ様」

配り終え、水炊きに戻ろうとしたところを呼び止められた。

「多喜ちゃん！」

フフと笑いながら、多喜ちゃんは私の頬を人差し指で軽くつついた。嬉しくて顔がほころぶ。
クリーム色のブラウスにスキニージーンズ、紺のエプロンをつけた彼女は、相変わらず可憐だ
った。手にした平皿に、たっぷりの鶏手羽がつやつやと盛られている。

「まだ来てないのかと思ったあ」

「お勝手が忙しくて。朝からずっといるのよ」

多喜ちゃんは滑らせるように、平皿を長机へ置いた。

「ああ、多喜ちゃんますます綺麗になって」

土産まんじゅうを受け取ったばかりの大叔母さん——おばあちゃんの妹——が目を細めた。多
喜ちゃんの腕を、親しげにぽんぽんと叩く。

「いえいえそんな」

「いい奥さんしてるよなあ、お父さんに見せてあげたかったな」

伴侶の大叔父さんも、感極まったように同調した。

「のんびりさせていただけます、おかげさまで」

「次は子供だな。頑張って男の子を生まにゃあ」

明るめのブラウンに染めた彼女の髪は、クリップでふわりと軽くまとめられていた。克子おば
さんは黒く固いショートカットで、姉妹というよりは親子に見えた。実際ふたりは十七歳も年が
離れている。ちなみに私の母とは十五歳差。三姉妹の超・末っ子というわけだ。

「やっぱり跡取りが大事なものねえ。うなぎなんか食べると、毎晩いいそうよ」

老夫婦がにっこりとうなずきあい、力なく私は笑った。善良そうなふりして、案外きわどい人
たち。

「コウノトリ様のご機嫌次第ですから」

笑顔でかわし、多喜ちゃんはすっと立ち上がる。

「じゃあみなさんごゆっくり」

「あれ、多喜ちゃん、一緒に飲まないの」

「ちょっとやることがあるんだ、ごめんね。納屋の方にいるから、ひらりちゃんも退屈したら来て」

軽く手を振り、彼女はあっさり去っていった。

えらく短い再会に拍子抜けしつつ、私は細く均衡のとれた後ろ姿に見惚れた。別のおじいさんがまたもセクハラめいて声をかけたが、彼女は手際よくスルーした。克子おばさんが夏の嵐なら、多喜ちゃんは秋のそよ風だ。物腰やわらかだが、人あたりはサラリと乾いている。他人との距離感が絶妙なのもかもしれない。老若男女がメロっと彼女に参る様を、夏ごとの集まりだけでも何度か目にしてきた。

彼女には人生なんてごく簡単なものかもしれない等と、たまに錯覚してしまう。他人に比べて苦痛が少なく、混乱もないのではないかと。そんなわけではないのだけれど。

宴会はにわかに盛り上がりを見せていた。とはいえ日の高いうちからたらふく食べ、夜っぴて飲むのが習わしなので、十五時の今はまだ序の口ともいえる。

席に戻ると水炊きが完成していて、克子おばさんが美味しいところを取り分けてくれた。

「やっぱり、夕チが悪かったのは宗教ね」

自分の分もたっぷりよそいながら、おばさんは憎々しげに話の続きを持ち出す。

「多喜子が生まれたところが一番はまってたわ、急に方角がどうの運気がどうのと言いだして。家を清めるなんて言って、玄関に火をつけようとしたこともあったのよ」

「おじいちゃん、放火しようとしたのっ」

ドン引きして叫んでしまった。違う違う、隆文おじさんが声を立てて笑う。

「かがり火みたいなものを焚いて、そのそばで祈祷するだけだよ。いくらなんでもね」

「あなたよく知ってるじゃないの」

「有名な話だろ。当時はそこらへんに信者がゴロゴロいたからな」

克子おばさんは、手荒に取り皿の白身魚をほぐす。

「母さんが実家から用立てた生活費のみならず！ 私の学費までお布施にしたのよ。絶対に許せないと思ったわ」

私と隆文おじさんは肩をすくめた。学費の件は、もう何度聞いたか分からないエピソードだ。おばさんの気分と話すタイミングによって、給食費だったり修学旅行の代金だったり、話のディテイルはさまざまに変化する。辛い思い出だとは思いますが、あまりにリピートされると、つい聞き流してしまい頭に入ってこない。

私はさりげなく話題を変えた。

「そういえば、さっき多喜ちゃんに会ったよ。どっか行っちゃったけど。納屋で何してんだろ？」

洗濯かな」

相変わらず綺麗だよーとつぶやきながら、失敬してきた手羽先にかじりついた。返事がないので、ついと顔をあげる。

いきなり、場に不穏な空気が漂っていた。

「納屋にいくって言ってたか？」

隆文おじさんが鋭く尋ねる。

「う、うん、そうだけど」

「はっきりそう言った？」

「言った……と思う」

信じられない。

地獄の底から響くような声で言い、克子おばさんは握っていたおたまを放り出した。

「また木彫りよ」

「うーん、木彫りだなあ、恐らく」

「昨日話したこと、全然響いてないんだわ、多喜子」

木彫り？

「なにになに？ 何事？ どうかした？」

克子おばさんは右手を額に押し当てたまま答えなかった。少し落ち着いた隆文おじさんが、苦笑して取り繕う。

「多喜ちゃん、最近ちょっと訳のわからんことに手を出していてね」

「あなた、余計なこと言わないで頂戴よ」

「隠してもどうせわかるさ。ひらりちゃんと多喜ちゃんは仲が良いんだから」

珍しい。克子おばさんと母との壮絶な争いは何度か経験したが、多喜ちゃんともめている場面はこれまで見たことがない。

「どういうこと？ さっきは普通を感じだったけど」

「いや、なんていうか、行動が奇妙というかね」

突然、克子おばさんが強い口調で断じた。

「あの子のせいでみんなが混乱してるのよ」

少し酔っているのか、おばさんの目じりが赤い。

「母さんも調子を狂わせてるわ、ひらりちゃんも見たでしょう。当り前よ。思い出したくもないことをほじくり返されたら気分悪いわよ。止めてくれって頼んでるのに聞きゃしない。本当に、何を考えてるのか……」

「まあ落ち着けよ。多喜ちゃんには多喜ちゃんの気持ちがあるんだろう」

「なら説明すればいいのよ、ただ黙って強行するから迷惑だって言ってるの」

ドウドウと収めるように、隆文おじさんは両手を軽くあげた。事態は結構深刻らしい。

「頭がおかしいんだわ。あの宗教にからむことは、母さんにとって一番のダメージなのに。私だって最近眠れない、あの頃のことを夢に出てくるんだもの。あの子のせいよ」

おばさんは一気にまくし立てた。宗教？

そういえば、克子おばさんと多喜ちゃんが同席しているのを、今日はまだ見ていない。気ぜわしく働く風でいて、宴会場である仏間に多喜ちゃんはほとんど寄りついていなかった。納屋にいるのか？ ガラクタシかない、暗くて暑いあの場所に。

タバコをはさんだ指で耳の後ろを搔きながら、おじさんはちらりと私を見た。

「まあ、そこまで言うとおおげさだけど。ちょっと心配ではあるんだ、急に熱中しだしたもんだからね。ひらりちゃん、もし彼女からホラ、理由なり何なり聞けたらさ。ちょろっと教えてくれよ」

「聞く？ 何を？ 聞いてどうするの？」

「話し合おうにもあの子、全然取り合ってくれないんだよ。冷静に話がしたいからさ、その、とっかかりが欲しくてさ」

さっぱり要領を得ない。私は首をかしげる。

「そんなにマズいこと始めちゃったわけ？ 多喜ちゃんは」

「マズいもマズい、大マズよっ」

おばさんのヒステリーは最高潮に達していた。

「たぎる思いを伝えるためとかってさ、素人くさい彫刻のために仕事も放りだしたのよ父さん。私と母さんがどれだけ苦労したことか。多喜子だって知ってるくせに、脈絡もなく真似しだして！ 本当に信じられない」

ガマンしきれず、私はもう一度聞く。

「木彫りって何？」

いらだたしげにこちらを見、克子おばさんはビールを一気にあおった。

「ハンドメイドのお守りよ」

可笑しそうに笑いながら、多喜ちゃんは棚からひとつ取って見せてくれた。

「凄いでしょ」

それは直径十センチくらいのメダル型で、木材から不恰好に切り出されていた。慣れない作業で刃がそれたのだろう、意図しない細い溝が無数についている。彫り跡はいかにも素人ながら、一彫り一彫りにありあまる力強さが込められていて、ちょっと気味が悪い。

「エグいねー」

思わず私はつぶやいた。何よりデザインがキテた。二重丸を描いた真ん中に『愛』の字が配されているのだ。安直すぎて、むしろ奇妙。二重丸を示す円は何とか彫れたものの、文字部分は細かくて難しかったのか早々に諦めたらしい。鉛筆の薄い下書きを、赤い油性マーカーでグリグリとなぞってごまかしている。習字の練習よろしく止めや払いがクッキリつけられた真っ赤な『愛』は、何ともおどろおどろしい造形だった。

「なんだか、触っていると邪念が伝わってきそう」

多喜ちゃんは苦笑し、色あせた大学ノートペラペラとめくった。

「作ったときのことが書いてあるの。<イマジネーションに従って創作。我が思い、このものに集中。力みなぎる。愛の紋章と命名>だって。ロマンチックよねえ」

ロマンチックってよりクレイジーだろう。ノートを受け取って目を通した。強い筆圧で（無駄に握力が強い）、一九八〇年五月に完成と記されていた。ふと思いついて計算してみる。今から三十二年前となると、多喜ちゃんがまだヨチヨチ歩きの頃だ。

「ねえ、多喜ちゃ……」

「こんなものもあるのよ」

私はまたも彼女の手にあるものに釘づけになった。お地蔵さんタイプのお守り人形で、明らかにオバケのキウ太郎を模していた。違いは、例の三本毛が頭の上にはないだけだ。黙って大学ノートを開く。<昨夜、床に入りて瞑想中にアイデア降る。飛び起きて制作。会心の出来、無垢な地蔵に涙する>……果てしないポジティブ思考。ちょっとうらやましい気さえした。作品にオリジナリティを見いだせず悩んだ、美大時代の自分と引き比べてしまう。

「パクるにしても、もうちょっとメジャーじゃないキャラにすればよかったのに」

情熱とセンスが折り合わないのって、はたから見るとものすごく虚しい。

「アニメなんてほとんど観ない人だったから。どこかでチラッと見かけて、気づかないうちに覚えちゃったんじゃないかしら。天啓だ！　くらいの勢いで思い出したのね、きっと」

多喜ちゃんはキウちゃん地蔵をそっと掴み、丁寧にハタキで払ってから棚の端へ戻す。

「父さんなりに考えるところはあったんでしょうけれど、ね」

今ひとつ飲み込めないながらも、私はふうんと相づちを打った。はまっていたという新興宗教に、制作意欲を刺激するような教えでもあったのだろうか。

結局、克子おばさんの怒りはおさまらなかった。多喜ちゃんへの不満からおじいちゃんの非情

に火は移り、最終的には「アンタがだらしがない」と隆文おじさんを糾弾する方向に向かった。私は手を洗うという名目で、そそくさと席をはずした。

手羽先のたれで汚れた指を流し、音をたてないように土間へ降り、隅の引き戸から納屋へ回る。薪で風呂を沸かしていた名残りで、洗面所は焚き口のある納屋に面していた。納屋はもともと馬小屋で、床が固めた土でできており、踏むとほのかに埃が舞う。裸電球がひとつあるきり窓もないので、昼間でも薄暗い。

つきあたりに据えられた大きな作業台で、多喜ちゃんは――おじさんとおばさんの予想通り――木製のお守りを彫っていた。

北側の壁には、長い木材を打ち付けただけの簡単な収納がある。三段も作られた壁一面の棚に、大小さまざまな、おじいちゃん謹製の木工品が並べられているのだった。一目見て、克子おばさんが怒っている元凶はこれだなと察する。ヤバい宗教の祭壇みたいに見えるのだ。ご近所さんに見られでもしたら何を思われるか分からない。私がおばさんでもやっぱり止めるだろう。

宗教的修行の一環かと思っていたが、多喜ちゃんによると「お守りづくり」は違うらしい。おじいちゃんが信仰心の発露として、勝手に考えてやっていただけだという。一人で盛り上がってシコシコ作ってたと思うと、身内ながら何だか悲しくなった。一方で、それらは確かに不思議なエネルギーを持っていた。へんに魅力的で、でも見てはいけなような気持ち悪さがあった。

それは例えば、すこし心を病んだ高校のクラスメイトが、テスト用紙の裏に描いた落書きに似ている。刹那的で技術がなくて、けれど果てしなくピュアな何か。

エプロンを薄い綿から丈夫なビニール製のものに替えて、木くずにまみれながら、多喜ちゃんは一心不乱に作っていた。傍らの大学ノートと、彫刻刀の刃先とを頻繁に見比べながら、拙い手つきでひたすらに彫った。盛夏の半野外は暑くて、多喜ちゃんの腕にも首筋にも、みっしりと汗が浮く。

声をかけると、ぼんやりこちらを見たのち、極めて優しくにっこりした。現実と折り合いをつけるように。

誰かがハンディカラオケを持ってきたらしい。仏間から、調子っぱずれの演歌が聞こえていた。ノイズだらけのテープ演奏、ぱらぱらと叩かれる拍手。酔っ払いたちの体力が尽きるまでは、ここでぶらぶらしていようと心に決める。なんだかんだと絡まれて、要らない情報を吹き込まれると後々やっかいだ。

鍬やリヤカーのほか、使わなくなった花瓶なども転がっていて、納屋はかなり狭苦しかった。スニーカーのつま先で障害物を蹴り、汚れた個所に手を触れないようバランスをとりながら、私は飾られたお守りたちを見て回る。

「なんかどれも似たりよったり」

鉄腕ツトムに激似の童人形を手に取り、私は言った。さっきの二つがインパクトありすぎて、他のものは霞んで見えてしまうのかもしれない。

ふと聞いてみる。

「多喜ちゃんを作ったの、ないの？」

熱心さから見て、ひとつくらい仕上げているもおかしくはないと思ったのだ。多喜ちゃんはちょっとはにかみながら、棚の中ほどに置かれた木片に手を伸ばした。

「あんまりじっくり見ないでね、まだ下手だから」

照れつつ渡してくれる。手のひらで転がすと、すべすべに磨かれた木肌が心地よい。

「うさぎ？」

細長い二羽のうさぎが、跳ねるように重なって描かれ、うすい藍色に色づけられていた。小さな目鼻とピンピンしたヒゲ、横にはニンジンとキャベツ。下手に切り出したりせず、市販品の四角い木材をそのまま生かしている。

「そう。ほら私、ペットを飼ったことがないでしょう。憧れてるの。それを形にしてみました」

「かわいいじゃん！」

私は叫んだ。まるで小学生のイラストみたいに、単純で愛らしい。おじいちゃんのものから感じられたような執着心は全くなく、素朴で、どこか力強いたたずまいをしている。

「色使いがシンプルでいいねえ」

実際、それはなかなか趣深かった。手先が器用なせいか彫り損じがほとんどなく、あってもデザインに取り込んで上手にごまかしている。お土産物屋で見かける『手作りキーホルダー』くらいの実力はあった。お守りかっていうと微妙だなラインだが、まあ效能さえ付せば、見た目はなんでもいいのだろう。

「ひらりちゃんにそう言ってもらえると、なんだか嬉しいわ。アートに詳しいんだものね」

詳しくないなーいと謙遜する。近ごろは美術館もろくに行けていないのだ。

多喜ちゃんは再びにっこりしてみせてから、作業台の椅子に戻った。背中が弾んでいるように見える。細い腕が、勤勉に小刻みに動く。

私は思い切って問うてみた。

「……なんでまた、木彫りなんか始めたの」

私の声がぎこちなかったせいか、多喜ちゃんは振り返って首をかしげた。

「？ いけない？」

「だって多喜ちゃん、ぜんぜんそういうの興味なかったし……いや、信仰の自由はあるけども……」

私はもごもごと口ごもった。

「ああ、克子姉さんが何か言ったのね」

軽くにらむようにして多喜ちゃんは笑う。

「宗教は関係ないの。あんな詐欺、全然興味ないわ」

「じゃあどうして急に？ みんな、心配してるしびっくりしてるよ」

彼女は小さなため息をつく。座ったまま椅子を回転させ、こちらへ向き直った。

「深い意味はないのよ、本当に。去年結婚したじゃない？ それで、勤めていた商社を退職したんだけど」

私はうなずいた。

「十五年近くも働いていたせいで、何かしら忙しくしている状態に慣れちゃってたのね。暇でし

ようがなくて。家事も午前中で全部終わってしまうし、だからってまたお仕事したいとは、少しも思わないし。習い事でも始めようかと思ってたら、タイミング良く……って言い方は悪いんだけど、母さんがひどくなったでしょう。頻繁にこちらに通うようになって。せっかくだから、家自体の片付けもしてみようかと思って、納戸なんか色々いじくってたのね」

納戸は、トイレに続く廊下の左手にあった。六畳に満たない小さな空間で、合板のタンスが二竿みちみちと詰め込まれ、その隙間には当面使う見込みのないもの――古びた漫画やら汚れた編みぐるみやら安物の掛け軸やら――が滅茶苦茶に放り込まれていた。木彫りの入ったズタ袋を見つけたのは、苦勞して半分程度までガラクタを減らしたときだったという。

「最初に制作日記が出てきたの、ほら、さっきの大学ノート。思わず読み込んでね。それからお守りが出るわ出るわ、四十個近くもあったかしら。とりあえず全部きれいに洗って、納屋の壁に並べて乾かした。それだけたくさんあると、さすがに壮観で。そしたら」

多喜ちゃんはキュッと肩をすくめてみせた。

「私も作りたくなかったの」

次の言葉を待つ。しかし、にこにこするだけで何も続かない。

「それだけ？」

私は拍子抜けして聞いた。

「道具もあらかた残ってるし、作り方まで詳細があるし、新たな趣味としては最適だなと思って」

多喜ちゃんは自分を納得させるように、何回かうなずいた。

「それだけなのよね」

ええー……。思わず不満の声をもらす。

嘘ではないが、核心を避けた説明という感じがした。多喜ちゃんは声をたてて笑った。

「なあに、他に何が聞きたいの？」

「今までの多喜ちゃんなら関わらなかったことじゃないかなあ、と思って。だって面倒だよ、いろいろ」

「面倒？」

「アンタッチャブルでしょ、タブーでしょ、相沢家の宗教関連は」

ひと呼吸、多喜ちゃんは空気を吐き出した。淡い微笑みを、口の端にひっかける。

「そういえば、不思議なことはあるわね」

「不思議？」

「……ううん、なんでもない。気にしないで。ごく個人的なこと」

「何なに。聞かせてよ」

多喜ちゃんは、目線をゆっくり棚に滑らせた。たくさんのお守りたちが眠る場所。

「そうね……例えばね、お守りって、何かを守るために作るものでしょう」

「そりゃあね」

「父さんも、大切な人たちを守りたいって気持ちでやってたんだと思うの。まあいくらか歪だったとはいえ、ね。例えばこの、ひなげしの花が彫ってある壁掛け」

鍋敷きのような円盤を、棚の一角から取り上げて多喜ちゃんは見せた。ひなげし？ チューリップにしか見えない。

「属してた宗教団体で、このあたり一帯のリーダー格だった方にまつわるものみたい。大病をされて、その回復を願って徹夜で彫ったそうよ。それからこのブローチ。当時通いつめてたスナックのママがベトナム旅行に行くってことで……要するに道中安全ね」

『愛』のかわりに、『旅』の文字がデカデカと彫られている。ここにあるってことは、受け取ってもらえなかったのだろうか。

「壁掛けは病室に置くには大きいし、スナックのママは信者じゃなかったかも。まあともかく、悪いことが愛する人々を襲いませぬようにって心をベースに作ってるでしょ。それは分かるの」

ことりと音をたてて、多喜ちゃんは円盤を置いた。湿気と暑さが背中にまとわりつく。

「私、そういうのが全然ないのよね」

「え？」

「自分でも驚いているんだけど、次から次へとできちゃうの、お守り。もう十五個くらいは作ったかもしれない。手順が簡単だから、すいすい彫れちゃう。でも最近気づいたの、お守りに込められるような思いが、私のなかには一つもない。不思議なくらい空っぽ」

防刃手袋をつかんで静かに抜き取り、作業台の隅に置いた。白いおでこの汗を払うように拭う。

「父さんが作ったものをはじめて見たときね、やっぱり不気味だった。なんだか訳の分からないパワーがあるでしょう、日記の内容もちょっと病気みたいだし。でも、なんていうのかな、私には足りないものが詰まっているような気もしたのね。なりふりかまわず、何かをつかみ取りに行く勢いっていうのかな」

腕を首の後ろに回し、彼女は青白いうなじをすうっと撫でた。

「がむしゃらな感じ？ 私、足りないなってずっと思っていて。引け目に感じてたの。一方的に思われて守られるばかり。父さんの真似でもしてみたら、少しはそういう力を得られるかなって。でも、全然だめ。強く祈ったり想ったりすると、誰かがコンセントを抜くの、やっぱり」

「コンセント？」

私は馬鹿みたいに繰り返した。多喜ちゃんはふっと笑った。

「本当にそんな感覚なのよ。小さいころからそうだった。電源が落ちるみたいに、一気に無気力になってしまう。目の前が真っ暗になって、何も考えられなくなる。幽体離脱みたいで怖い。だから、何事も深入りを避ける癖がついてるんだわ。ふふ、おかしいでしょ。

少しでも緩和されればと思ってはじめてたけど、……もう諦めた。結局変わらないんだものね。近々、木彫りは止めるつもり。

安心した？

母さんの調子には関係ないと思うけど（もともと悪くなってたもの）、姉さんがそう思い込んでいる以上は仕方がないし。潮どき」

私は言葉を飲み込む。

確かにそういうところはあった。多喜ちゃんは優しいし気が利くが、一步踏みこんで何かを思

うということは苦手なように見えた。モノでも、ヒトでも。

でも周囲は――歴代の恋人たち含め――そんな彼女だからこそ好きだったはずだ。エレガントでクールな多喜ちゃん。本人が苦悩していたなんて、きっと誰も知らなかった。

結婚式で見た、多喜ちゃんの旦那さんを思い出す。すらりと背が高く、眼鏡をかけていて、真面目そうな顔立ちで。最後の挨拶で、彼女は最高の伴侶ですと照れくさそうに言った彼。もしかして、奴が彼女をここまで追い詰めているのか？

「違う、違うのよ。へんな勘違いしないで」

ファンクラブ会長みたく憤慨する私に、あわてて多喜ちゃんは否定した。

「彼は全然関係ないの。とてもいい夫よ。これは私だけの問題」

それならいいけど。私はむっつり黙り込む。

多喜ちゃんも心ここにあらずといった表情で、また並んだお守りを見つめた。手持ちぶさたな沈黙が続く。セミたちの絶叫が暗い納屋いっばいにせまり、私は軽いめまいを感じる。

さまざまな種類のセミがいてさまざまな鳴き声があるはずなのに、クマゼミのが強すぎてそれしか聞こえない。いつもそうだ。小さいときは、奴らばっかズルいなあと思っていたものだ。大人になった今では、たくさんの人に聞かれるからラッキーとは限らない、などと考えている。何が幸せかなんて、本人以外には絶対に分からないものだと。

「わあっ、わわわ！」

ふいに隆文おじさんの声が聞こえた。

土間を隔てた仏間からにしては、えらく音量が大きくて鋭い。カラオケの伴奏は、いつしか途切れていた。手伝いに来てくれていたお隣さんたちのだみ声まで、尖って発せられる。どう聞いても歓談という雰囲気ではなかった。がなる男声、悲鳴に近い女声。ついには壁を強く叩く音まで聞こえ始める。

私は思わずつり込まれ、耳をすませた。

茶碗がなだれ落ちるような衝撃音が響いた。睨みあうような沈黙の後、ガラスもしくは陶器が再びぶつかり合った。諍いか。泥酔した輩が、気に入らない誰かれに喧嘩でもぶっかけたか。やめなさいよと諭す、年長者のしわがれ声が混じる。

いよいよ尋常ではない。何だか怖くなり、私は多喜ちゃんを振り返った。

「ねえ、向こう、なんかちょっと揉めてな……」

「ひらりちゃん」

突然、強く腕をつかまれた。白いブラウスがとろりと触れた。

「ひらりちゃんは、守りたいもの、ある？ 明確に、コレって言える？」

我にかえる。意識が納屋に引き戻される。

セミたちの叫びは、フェイドアウトしたように届かなくなっていた。一瞬忘れていた多喜ちゃんの顔を、私は改めてまじまじと見た。彼女は切迫した表情をしていた。何も聞こえていないかのように瞳は澄みきり、小刻みに震えていた。気にしていた母屋の喧騒まで、すっとぼやけて遠のいた。

守りたいもの。

もちろんある。家族だって彼氏だって友達だって傷ついてほしくないし、私の努力でなんとかなるなら頑張ろうと思う。ごく普通の、存在を疑ったことさえない気持ちだ。むしろ私は、そういう想いが強い方かもしれない。

多喜ちゃんは、それが本当に分からないのだろうか？ 一ミリも？

複数の怒鳴り声が、ふいに入り乱れて私たちの耳に届いた。

「ひらりへ

やっと梅雨があけて、いよいよ暑い季節ですね。夏バテなどしていませんか？

今年もひとりで相沢家に帰省する由、了解しました。すこしですが、お小遣いを同封しておきます。お土産を忘れず買って行ってください。

いつもは電話かメールで済ませてるのに、急に手紙なんてビックリしたでしょ。ママもなんだか面はゆい気持ち。

先日つらつらと考え事をしていて――おばあちゃんのことです――ママがボケたりしたときに事情を知らないと、あなたが困るかもしれないなあって、急に思い当たったんです。

認知症が始まって以降、おばあちゃんは夥しい毒を生み出すようになりました。妄想と事実が混濁した記憶に基づく毒なので、つきあう者は何を信じていいか分からず、激しく消耗します。私たち三姉妹は今、大変に苦勞をしているってわけ。あなたもいつか同じ種類の苦惱を抱える日がくると気づき、ちょっと背筋が寒くなりました。

実家を嫌ってる理由、はっきり話したことはなかったわよね？

あなた一人っ子だし、考えだしたら止まらなくなってしまって。というわけで書き残しておこうかなと思いました。いわば遺書ですね。

一応、どこかにとっておいてください。知っているのと知らないのでは対処が違うはずですが、きっと。いずれ役立つと思います。

さて、何から説明しましょうか。

端的に言えば、おじいちゃんの浮気現場を目撃したんです。十六歳くらいだったかな。見知らぬ誰かとベタベタしてたとか、そんなレベルの話ではなく……連れ込み宿に入っていくところを見ました。傑作でしょ。

冬で、雪がちらつく夕方でした。当時あの町には高校がなくってね。隣の市からつながる郊外バスで、私は帰宅する途中でした。気分よく朝と同じバスに乗り込んで、うたた寝しながら雪の残る国道を走っていたときのことでした。

ふと目が覚めて窓の外を見たら、おじいちゃんと若い女性が、肩を寄せ合って立っていたの。

山中のいかがわしい宿の前にね。そりゃあびっくりしたわ。隣の市と我が町の間には小さな山がひとつあり、くり抜かれて長めのトンネルが掘られていました。その出入口付近に、連れ込み宿はありました。そこがまた、夕方には必ず渋滞するポイントで……それ以上見たくないのにバスが動かないんです。二十回は確認したでしょうか。

やっぱり自分の父親に間違いありません。手に手を取り合っただのれんをくぐるころまで、しっかり確認してしまって。その上「あの女の人、知ってる」と気づいたわけです。見たことあ

ると。

宗教関係の知り合い――まだうら若い、教祖の末娘でした。

近所の拝み屋さんに過ぎなかった人を、おじいちゃんが私財を投げ打って宗教法人に担ぎ上げたのは知っていますね。

もちろん私たち家族にとっては大迷惑だったけれど、そのこと自体は志を通したのだととらえることもできて、まだ納得しやすかったのです。けれど教祖の娘に横恋慕となれば、話は別。おじいちゃんにとっての宗教が何なのか、今捧げられている我が家のお金は何にあたるのか、意味が全然違ってくるでしょう？

それまでも色々ありすぎて、私は十六にして父親に絶望していました。……つもりでした。でもやはり悲しかった。おじいちゃんって、家で一緒に過ごすだけなら、とても気持ちのいい人だったんです。偉丈夫でウィットに富んでいて、ある意味では自慢の父だった。だからこそ、余計に苦しかった気がします。

おばあちゃんはおばあちゃん、当時かなりナーバスになっていました。おじいちゃんは不審な行動ばかりとるし、お布施だとかってお金は搾り取られるし、まあ当然です。この上そんな乱れた関係を聞かされたら、蒸発してしまうかもと怖くなりました。

そのすべてが、肩にのしかかるようで辛かった。

走り出したバスの座席にうずくまり、私は頭をかかえました。帰りたくなかったわ。でも、他にいくところもないし。喫茶店はもちろん、バス停に屋根さえなかった時代です。追い詰められた暗い気持ちで家路につきました。言おうか言うまいか、言うならどう切り出そうか、悶々とシミュレーションしながらね。

あんなに落ち込んだことって、他にないかもしれません。

予想に反し、おばあちゃんは疲れ果てて寝ていました。

克子おばさんはアルバイトでいなかったのかな。家はしんと静まり返っていました。猶予ができた気がして、私は少しほっとしました。こたつをしつらえた和室は雑然と散らかり、寝転がったおばあちゃんのそばに、一歳くらいの多喜子がお座りしていました。退屈してたのか私を見て、もみじみたいな手を叩いて喜びました。

つかまり立ちを始めている多喜子が危なくないよう、おばあちゃんはストーブのスイッチを切って寝てしまったようで、部屋は震え上がるほど寒かった。おしめを触ったら、ぐっしょりして相当重くなっていました。それでも彼女は全身で、かまってもらえた喜びを表しました。赤く冷えた小さな手をこぶしに握って、私の顔と眼鏡を交互に触りました。

手早く布おむつを替え、ストーブをつけ、薄味の雑炊を作ってあげました。スプーンでおちよぼ口に運んでやると、多喜子はツバメみたいに勢いづいて飲み込みました。抱きしめると、頭からほのかに汗のにおいがしました。

そっと揺すってみたけれど、おばあちゃんはぴくりとも目を開けません。外はまた風雪が強くなり、古びた木枠のガラス窓は、ビリビリと細かく震えました。

茶碗一杯の離乳食を平らげ、満足そうに可愛げっぷをし、多喜子はおもむろに居眠りをはじめました。腕のなかで寝られると、夕食の支度にも動けません。おばあちゃんは目覚めず、克子おばさんからも連絡はなく、想定していた激しい応酬は一向に訪れなくて。拍子抜けし、私はぼんやりしていました。

寒くて動く気も起らなくてね。こたつの暖かさで、思考は不鮮明にぼやけていきました。尖らせていたはずの神経はとろけるように緩み、怠惰に流れるようでした。バスで見た醜態は――半ば意識的に――忘れ、私は何もせず考え事をしていました。

つやつやした幼な子の頭をなでていると、私はふと、顕微鏡をのぞいたときの感慨を思い出しました。

その日、扱いの初歩を学校でおさらいしていたんです。ガラスに髪の毛を一本だけのせて、小さいガラスでさらに封をして、調節ねじをくるくる回して、黒い筒に左目をあてがう。右目をぎゅっとつぶりながら、キューティクルのひだをじっくり見つめ「体は、さまざまな小さいものたちでできているんだ」なんて感じ入る。知識で分かってはいても、実際に目にすると、なかなか趣深い体験でした。

視線を落とすと、多喜子の頭部が目前にありました。お鉢いっぱい、新鮮な細胞が踊っているようにみえました。この美しくみずみずしい細胞たちは、いったいどこから生まれ、何から始まったのかしら？ そんなことを、私はつらつらと夢想しはじめました。

すべらかに水分を含んだ、まっすぐな頭髪を構成するものたちの発生源は何だろう。分裂することで増えるのは分かっているけれど、もっと、もっとその前は……たわいもない暇つぶしは、だんだん深く入り組んできました。自然発生するわけじゃない、そんな馬鹿な話はない。人はそういうふうには生まれません。私は、奇妙な違和感を感じました。

誰かの意志が介在しているはずだ、遠くない過去におじいちゃんとおばあちゃんが交わり授かったもので、後ろ暗い歓喜が、二人の間にあったという証明で……

ひゅっと思考がワープしました。

『間違いなく、父さんと母さんが作ったんだわ』

まるで隕石が落ちてきたみたいに、唐突に気づいたんです。

連れ込み宿でやってることと変わらない行為を、おじいちゃんとおばあちゃんは、この屋根の下で粛々と実行したのだと。その結果として卵子と精子は結びつき、この子がいるのだと。しかもそれは、少しも遠くない過去だと。

あまりに当たり前の事実です。でもそのときの私にとっては、大きな衝撃でした。

思春期であったこと、ストレスが頂点に達していたこと、おじいちゃんの不倫を見かけたこと。オクテで無知だったこと。すべてが重なりあい、影響しあったのでしょう。その瞬間、私は激しく傷つきました。必要以上にね。

保健体育やなんかで、赤ちゃんができる過程を学んではいました。でもそれと、おじいちゃん

のふしだと、無垢で可愛い多喜子とを結びつけて考えたことは一度もなかったのです。

私は、茫然と傍らのおばあちゃんを見やりました。

痩せた肩を小さくすくめて、膝を抱くようにして、彼女は転がっていました。かぶった布団からのぞく手足も首も、四十路近い女性のものとは思えないくらいほっそりと華奢で、肌つやも悪くありませんでした。疲れて隈の濃い顔は、色白で皺が少ないせいか楚々として、むしろ美しかった。彼女はまだまだ現役なんだと、初めて見る人のように気がつきました。

騙された。とっさにそう思いました。

私はそれまで、母さんが――おばあちゃんのことね――ただ耐えているのだろうと思いこんでいたんです。聖母マリアのように、子どものために苦役を背負っているのだと思っていた。でも本当は違うんだ、自分のためにやってるんだと閃いちゃって。おじいちゃんはもちろん悪い人よ。けれどおばあちゃんは、そんな夫と暗い悦びを共有していた。女遊びもお酒も宗教狂いも、すべての異常を受け入れて、しごく不安定になりながらも拒絶はしなかった。

ショックのあまり私は思考停止し、続いて激しい無気力を味わいました。

すべてがどうでもよくなりました。父も母も、姉も、小さな妹も。

この家の一員であるという自覚を、うまく感じるができなくなったのです。相沢家に属するという意識は、思い込み過ぎないのではという疑問が吹き出しました。いつでも切り離せるもので、信頼という細い糸だけが互いを結んでいただけなのではないかと。真っ暗な洞窟を覗き込んだような、空虚な心地になったわ。理解してくれる者も保護してくれる者も、結局は一人もいない。広い砂漠にただひとり、という絶望を感じました。

一方でそれは爽やかな、空気になったような身軽さをもたらしました。圧倒的な快感でした。生まれて初めての感覚で、決して手放したくないと私は強く願いました。そのためなら、縁を切ることなど非常に些末なことだ、とまで考えました。

人によっては、自由と表現するものでしょう。

愛されなかったとまでは思いません。育ててもらった恩は感じています。それでも、あの家は苦しすぎた。私はのろまで素直で、もっとも感じやすい次女でした。

〔#傍点〕この家には、もう金輪際関わりたくない〔#傍点終わり〕。

私は決意しました。

来るべき自立心の芽生えだったのかもしれませんがね。言われているほど、健全な感情ではなかった気がしますけれど。

私はひたすらに勉強し、奨学金を得て東京に出ました。おじいちゃんは宗教から先物取引に興味を移し（そして大失敗し）、訳の分からない工芸にはまり、経営してた会社は買収。一家は事実上、空中分解して今に至ります。

結局、誰にも、何も報告しませんでした。

もっとひどい家庭なんて、いくらでもあると聞きます。この程度のことでトラウマだ何だとゴネている私は、タフじゃないのかもしれませんが。自分も子供を産んだくせに、潔癖すぎると笑われるでしょう。ときどき自分でも許せなくなります。ほかに道はなかったのか、単に踏ん張る根性がなかっただけなんじゃないかと。

ひたすら働いて出来るかぎり仕送りをする事で、生家との関わりを極力避けてきました。克子お婆さんは、未だに私を恨んでいます。お前は変わってしまったと糾弾します。多喜子から知らされるお婆あちゃんの現状は、年々ひどくなっていくばかりです。私は姉妹をいけにえとして差し出したのだと思います。ある意味では。

でも後悔していません。

そうしなければ、たぶん私は、自分の家庭を築けなかった。あの家の流れに身を任せているうちは——そのほうが楽で、正しいこともたくさんあったと思うけれど——誰かをがむしゃらに信じ、新たに子どもを産むという決断ができなかったと思います。それは確かなことです。

長い手紙になりました。少しでも伝わればいいなあと願いつつ、筆を置きます。

これを読んで、さらに縛られた気がしたなら、本当に申し訳なく思います。けれども一方で、道を選ぶのは貴方自身です。

エゴを通しなさい。

まったく構いません。それは私が痛い思いをして学んだ、唯一の人生訓です。

お正月はこちらに帰ってこれますか？ パパと一緒に心待ちにしていますよ。それでは。

人々は立ち上がり、仁王立ちのおばあちゃんを茫然と見つめていた。

おばあちゃんは、香港映画よろしく大暴れしていた。仏間は宴会場から修羅場へと変貌していた。食べかけの料理があちこちに皿ごとぶちまけられ、新聞紙が幾枚もかぶせられていた。惨憺たるありさまだった。

隣家のお嫁さんが素早く身を寄せ、「救急車呼ぼうか」と克子おばさんにつぶやく。おばさんはさっと首を振り、ライオンと対峙するようにタイミングをはかった。かけつけた私たちに気がつき、ほら見たことかと憎悪に満ちた目つきで睨む。

「おんどりゃあー」

おばあちゃんがいきなり叫んだ。酔客たちは一斉に驚き、素早く身を引いた。

彼女はフラミンゴばりに高く足を上げ、ふらつきながら長机にかかと落としをした。ものすごくスピードが遅い。周りの人が、置いてあったジュースやおつまみをささっとどけられるくらいには。それでもパワーは余っているらしく、ぶんと腕を振り回した。

ゴン。

かなり大きな音がする。勢いで柱に頭をぶつけたのだ。隆文おじさんが顔をしかめ、そっと歩み寄ろうとした。おばあちゃんは思い切り目をむき、裂けてかすれた声で罵倒した。

「汚い手でさわるな！」

白髪のボブヘアが乱れ、すだれのように顔を半分隠す。額がわずかに割れて、ひとすじ血が流れ鼻の横を通った。おじさんはなおも近づこうとしたが、烈しく威嚇する姿にいったん引き下がった。

「どうしちゃったの」

つつ立っている若いハトコに、私はささやくように尋ねる。

「分からないよ。なんの前触れもなく飛び出してきたんだ」

手の甲で汗をぬぐいながら、彼はつぶやき返す。

狐憑きとしか思えない変身ぶりではないか。振り向くと、多喜ちゃんも張りつめた表情でじっと前を見ていた。勝気さをたたえ、肝の座った小さな声で言う。

「発作よ。ともかく怒ってるの。気が済むまで暴れるわ」

「よくあるの？」

「ここまで酷かったことはないわ、少なくとも力に訴えたことはなかったはず。すごく興奮してる。まずは落ち着かせなきゃ」

仏間のド真ん中で、おばあちゃんはファイティングポーズを取っていた。テレビの前でぼんやりしていた姿とは別人のように、機敏なトカゲみたく、周囲のちょっとした動きにも警戒心を表した。母からは、おばあちゃんがここまでの状況とは聞かされていない。つい最近の変化だからなのか、克子おばさんと多喜ちゃんとの対処しようと黙っていたのか。どちらにせよ、在宅で介護できるレベルではないように見える。

「感情をコントロールする薬とか、出してもらってないの」

「もう飲んでる。効いてないのよ」

件の大叔父さんが、突然「いいかげんにしなさい」と一喝した。

温厚そうな印象とはちぐはぐに、甲高くヒステリックな声を出した。老いた男性らしく、喉仏が小刻みに震えた。一同が危惧した瞬間、おばあちゃんはご飯茶碗をひつつかんで投げた。

ひしゃげたような音を立てて、茶碗はふすまに激突する。

ゴツンではなくバシャンって音がするんだわ——私はぼんやりと考えてしまう。心身ともにフリーズしてしまい、上手く機能しない。ヒットこそしなかったものの、大叔父さんから十五センチくらいしか離れていない場所にそれは転がった。彼はひるんで二、三步後ずさる。複数の人が身を乗り出し、大叔父さんを更に後方へ下がらせた。

緊張感は、否が応でも高まっていく。

落ち着いて、落ち着いて……呪文のようにつぶやきながら、親戚一同は、おばあちゃんを取り巻く輪を狭めようとした。そのたびに物を投げたり噛みついたり、なかなか距離を縮めることができなかった。無為な時間ばかりが過ぎる。かかりつけ医が応答しないらしく、隆文おじさんは携帯のボタンを連打し続けている。

「母さん、どうしたの。何をそんなに怒ることがあるの。教えて」

克子おばさんが、ずっと前に出て話しかけた。

静かで低い響きだ。そんな声の持ち合わせがあったのかと、私は秘かに驚いた。おばさんは悲しみに満ちた表情で続ける。

「母さんらしくないわ」

おばあちゃんは、フーフーフと荒く息を吐いた。

「妾だ」

年老いてなお血気盛んな野良猫のように、汚れた入れ歯をキリキリ噛み合わせる。

「え？」

「妾の女、ほら、拝み屋の娘だよ。孕んだんだ。男の赤子を抱いてた。すごく、ものすごく暑い日だ。それから長い。きつともう育ってる。うちの金を狙ってる。今すぐ始末しないと」

おばあちゃんが再び手を振り回した。どよめく人々の眼前で、こぶしがひゅうと空を切った。

かぼそい声で、おばさんは聞き返す。

「……何を、何を言ってるの」

「お前は知らない、鈍感だから。芽衣子は気づいて出て行ったぞ、大騒ぎするばかりで役立たずが。偉そうにするだけが取り柄だから、肝心のことが把握できないんだ。引っ込んでろ」

誰も口を開かない。あまりに酷い言い様で、居合わせた一同は思わず背中を寒くする。みな、常軌を逸した人間を目にするのは初めてなのだ。

おばさんは唇を震わせ、それでも矜持を保とうと、目のふちに涙をとどまらせていた。声を出そうとするが叶わない。老いた後ろ姿は、まるで少女に戻ったようで、傷ついて小さく見えた。こぼれたサイダーのしずくが、どこかで床を規則正しく叩く。

多喜ちゃんがずっと立ち上がり、おばさんのそばに寄り添った。

「母さん、克子姉さんだって知ってたわ」

毅然とした態度でおばあちゃんの目の前に立ち、言い放つ。座っている私からは、いきおい見上げる格好になった。思わず身がすくんだ。

「知ってるわけがない！」

おばあちゃんは頭をガリガリとかきむしる。

「知ってたわ。口にできなかつただけ。私たち、父さんのことはちゃんと知ってる。だって」

冷たい微笑みを多喜ちゃんは浮かべ、ちらりと周りを見渡した。「[#傍点] みんなが教えてくれるんだもの [#傍点終わり]」

気まずい空気があたりを包む。克子おばさんが、多喜ちゃんのブラウスをそっと握って引いた。味方しているのか制止しているのか、はっきりとは分からない。

かつて三姉妹がどのような評判のうちに暮らしていたのか、私は知らなかった。けれど、あまり好ましい家庭として見られていなかったことくらいは分かる。ふしだらで騙されやすい旦那さん、それをコントロールできない無感動な奥さん、びくびくした子供たち。善良で素朴な人々は、現在も軽蔑と好奇心いっぱい、一部始終を眺めていた。私は膝で、二人のそばににじり寄る。今できる、精一杯の応援。

「ともかく、母さん……」

克子おばさんが、身を立て直して再度話しかけたときだった。ふいに、おばあちゃんが表情を変えた。

近眼の人のように、眉間にしわを寄せて一点を見つめた。多喜ちゃんを上から下まで睨めつけ、じわじわと近寄る。さっきの皮肉が効いたか、誰も止めに入ろうとはしない。

「……お前、妾の子だろう」

人差し指を強くつっぱらせ、多喜ちゃんに向ける。

「母さんっ！」

克子おばさんが、耐えられないというように叫んだ。おばあちゃんの唇に、よだれがあふれて鈍く光った。

「そうだ、あの女にそっくりだ。その目、ぐりぐり大きい目。細っこい腰も。だから文句があるんだろう」

筋ばった指を曲げ激しく爪をかみながら、おばあちゃんは低く笑う。多喜ちゃんは何も言わない。

「生まれた年も同じなんだからねえ。ああ、ご存知ですか？ あたし男の子を生んだんですよ、本当は。でも妾が頼むから、先方の娘っ子と、うちの長男坊を取り換えてやったの。私も年取ってましたからね、最後の子だったから。生まれ月まで一緒だもんで、誰も分からなかったわね。だって哀れでしょう、父なし子なんて。だからあたし……」

「お義母さん、そこまでにしましょう！ 病院行こう、今すぐ」

隆文おじさんが強硬手段に出た。暴れるおばあちゃんに足をかけて（ソフトに）床に倒す。呆けたように固まっていた男性陣は、機敏さを取り戻して補助にまわった。ピンセットで挟まれた蜘蛛のように、おばあちゃんは足を動かして抵抗した。

「妾の子だよ、あの女は！ 本当なんだよ！」

声を枯らして叫ぶ。克子おばさんは号泣していた。

「何てこと言うの母さん。多喜子はこの家で産んだんじゃないの。それから一度も家から出していないのに、どうして」

「克子、いいから」

「だってひどいわ」

私は座ったまま、泣き崩れるおばさんを包み込むように支えた。

しゃがみこんだ姿勢からは、多喜ちゃんの手と脚だけが見えた。なおも彼女は言葉を発しなかった。薄ピンクのネイルを塗られた指が、ぴくぴくと小さく痙攣していた。けれど震えはなく、動揺を読み取ることはできなかった。何故か恐ろしくて、私は彼女の顔を見られない。

「ひらりちゃん、二人を見てて。車出してくるから」

おじさんが言い残して去りかけたそのとき、おばあちゃんがバリケードを振り切った。

あっという間もなかった。どう車に乗せるかを画策している人々の一瞬の間隙について、彼女は渾身の力でこちらに走ってきた。実際にはこけつまろびつだったが、とっさのことに制止が間に合わない。

おばあちゃんは多喜ちゃんの胸ぐらをつかみ、勢いよく一緒に倒れ込んだ。

「うがああああああ」

七十一歳とは思えない、生命力に満ちた叫び声をあげる。止めなきゃ、と思いながらも、驚きすぎて体が動かない。華奢なおばさんを私は無意識にかばった。

「どうしてええええ」

おばあちゃんは激しく怒っていた。ちぎれるように涙がこぼれ、しみだらけの首を濡らした。

「返してええええ。あの子を返してえええええ。お願いだから返してえええ」

思わず多喜ちゃんを見た。彼女は押しつぶされるまま、脱力して耐えていた。涙は流れていない。あるのは無表情だけだった。深くて何もうつさない、黒々とした沼が彼女を侵していくように見えた。薄く整った唇は、軽く開けられて動いている。桃色の舌が、揺すぶられるたびにチロチロと出入りする。

私は怖かった。取り返しのつかない世界へ、皆行ってしまう気がした。

がくがくと肩をつかんで揺すり、おばあちゃんは多喜ちゃんの耳元で叫びつづけた。

「返してええええ。もとに戻してえええっ」

小学校に入ったばかりの、夏の思い出。

「きのうは……おかあさんと、かつこおばさんが、けんかをしていました」

一文字ずつ口に出しながら、鉛筆でマス目を埋めていく。縁側で、おばあちゃんと日記を書いていた。太陽は傾き、抜けるような青空の隅っこから、もくもくと入道雲が湧いていた。

おばあちゃんがくすくすと笑う。

「それ、書かないほうがいいんじゃないかしら。先生が見るんでしょう？」

「だってほんとうのことだもん」

それもそうねとつぶやいて、おばあちゃんはゆるりと団扇を動かした。色白の肌に、花柄のブラウスが映えている。

「なんであんなにけんかするのかなあ。パパとはしないのに」

ノートを閉じ、私は言った。昼すぎに激しい言い争いをし、克子お婆さんは自宅にとんぼ返り、母は苛立ち紛れに買い物へ出かけていた。

不思議だった。

滅多に怒ることのない母が、ここに来ると気性を激しくする。むきだしの彼女が現れる。

「本当は仲がいいのよ」

泰然とおばあちゃんは言った。

うそだあ、と私は反論した。だってケンカばかりするおともだちはきらいだもん。おばあちゃんは微笑み、なおも繰り返す。

「お互い大好きなのよ。ただ、素直になれないだけなのよ」

すこし考え、私は聞いた。

「じゃあ、たきちゃんは？ たきちゃんはけんかしないよ。いつもにこにこしてる」

おばあちゃんの表情がくもった。心配そうな瞳で、そっとうなずく。

「そうね、多喜子が一番心配。我慢してしまう子だから」

おばあちゃんは、グレーにひずみはじめた空を見上げる。よく意味がわからず、私は首をひねった。また優しい顔にもどって、おばあちゃんは私の頭をなでた。急に華やいだ声を出す。

「いいものを見せてあげる」

おばあちゃんは立ち上がり、仏間に置かれた大仰な飾り棚から、古びた木片を取り出した。星型に成形されたそれは、磨かれただけで何の印もついていない。ながめすがめつし、私はさらに首をひねった。重しにするには軽すぎるし、穴がないからぶら下げられない。裏返してもものっぺらぼうだ。

穏やかに笑いながら、おばあちゃんは木製の星を引き取った。

「お守りですって。おじいちゃんがくれたのよ。捨てたと思ってたけど、昨日出てきたの」

前年のお葬式を、否応なく思い出す。うまれてはじめてのお弔い。いろんな種類の黒い服、たくさんの白い花、大人たちの号泣。うっすら瞼の開いた目、思いのほか小さかった頭蓋骨。おじいちゃんが死んだ、次の日。

「なんのおまもり？」

私は聞いた。おばあちゃんは遠くに目をやり、すっと口角を上げた。

「わからないわ。あのひとの考えてることは、いつも不思議」

中指で、星の表面を触る。何故かとても嬉しそうに。

「多喜子、きっと似てるのね」

あらためて私に目を合わせ、優しくにっこりした。ちょっと風にあてるから置いといてねと

断り、おばあちゃんはお勝手に歩いていく。

余分な脂肪のないスレンダーさは、娘たちと共通する体型だ。綺麗な首筋と、ごく細い足首。そのほっそりとした後ろ姿を、私はながめる。縁側に残された星のお守りは、からりと乾いて変わらず滑らかだった。

私は思い切り背伸びをした。

図書館で勉強している多喜ちゃんが、そろそろ帰ってくる頃だ。赤いリンゴ模様のバッグが見えないか、庭に向かって目を凝らした。

ごろごろと雷の近づく音がする。猫が喉を鳴らす響きに、それはよく似ている。

自分が何を思ったのか、今でもよく分からない。

負の空気を打ち破らなければ、と思ったのかもしれない。克子おばさんと多喜ちゃんの、血を吹きそうな心の傷を目の当たりにしたせいかもしれない。衝動は、感情の奥の奥から、飛び出すように現れた。

それは未だ私の手のひらにあった。多喜ちゃんのうさぎ。ニンジンとキャベツが添えられた、のどかで平和な木のお守り。騒ぎを聞きつけて飛び出して以来、握りしめたまま忘れていた。ふと目について存在を思い出した瞬間、私は勢いよく立ち上がり、拳ごとおばあちゃんの目の前に差し出していた。

そこに理屈はなかった。ともかく反射で体が動いた。

「ほら、お守りだよ！」

一発勝負の賭けだった。

取り囲むおじさんたちが、ぎょっとした様子を見せる。私はぐっと腕を下げて、二匹のうさぎがよく見えるよう、大きく指を広げた。

「おばあちゃんのための、お守りだよ」

噛み砕くように、ゆっくりと大きな声で続けた。無理な姿勢で押さえつけられながら、おばあちゃんはギロリと私を見、そして手のひらの木工品を見た。

重苦しい沈黙が続く。視界のすみに、隆文おじさんの姿が映った。苦りきった表情で、首と手を大きく振った。止めろと言っているのだ。口には出さずとも、周囲はそろって懸念を表していた。一瞬私は気弱になった。さきほどの大叔父さんと同じく、思い上がった空気の読めない、危険な行為だろうか。

いや、と思いなおす。

例え殴られても構わない。私だってやっていられないのだ。

悲しくてやりきれないのだ。優しい日々を思い出したとき、声を上げて泣きたくなるのだ。彼女たちの傷を知っているのだ。できることは全てやりたいのだ。

手の上のお守りを、おばあちゃんは凝視した。

動くスピードは急激に落ちていた。筋だらけの右手を伸ばし、そっとうさぎのお守りに触れた。熱いものを触るかのよう、爪先でつんつんとつついた。指の腹で表面を撫でる。少しずつ、少しずつ、撫でさする面積が増えていく。

その静かな動きに驚きが広がり、張りつめていた空気はわずかに和らいだ。押さえていた周囲の者も、身構えながら徐々に力を解いた。

おばあちゃんは、ついに両手を差し出す。その掌へ、私はお守りを滑り込ませた。

「うさぎ」

幼子のように素直な声で、おばあちゃんは私に問いかけた。

「そう、うさぎだね」

せりあがる涙をこらえながら答えた。うさぎ。泣いてはいけない、悲しいことではない。人はみな老いる。老いて朽ちて、思い出のなかだけで生きる残像へと姿を変える。

「かわいい、かわいい。これはあたしの」

無垢な笑みをひろげ、おばあちゃんは嬉しそうに言う。くっつけた両手にお守りをのせ、ごしごしと頬ずりをした。さらさらの木の質感を確かめ、何度も私の顔を見ては笑う。山鳩の鳴き声が聞こえた。いつしか日暮れが迫っていた。思い出したように、隆文おじさんが表に走り出していた。

「あのひとがくれたのとおなじ」

にこにここと呟く。白髪のはきはきと、部屋着もひどく汚れたままだ。

「ねえ、どうしてもってるの？」

血液が、顔のあちこちに赤黒いかたまりをつくっている。かつてのおばあちゃんとは似ても似つかない。これ以上何も変わらない、もとには戻らない。それでも、私たちは彼女を愛していかなければならない。血がつながっているから。自分の命は、彼女から続いているからだ。

私は振り向かず、ひとさし指だけ立てて背後を指す。

「あの子が作ってくれたのよ」

一語一語、はっきりと伝えた。おばあちゃんは、破裂するように笑顔を大きくした。止まっていた時間が緩やかに流れはじめ、私はどうにか上手くやれたことを知る。

多喜ちゃんが一生懸命彫った、きっと何かを守るはずのお守り。

セミの合唱が突然よみがえる。私は、かつての娘たちへとトリップする。

乗り合いバスの座席に身をかがめて、アルバイトをしている食品工場の隅で、揺さぶっても目を覚まさない母親の傍らで。心ない人々の言葉に傷ついて、諦めきった自分が恐ろしく悲しくて、年月を経ても癒されない傷におののいて。

彼女たちは泣く。たったひとりで、暗いところで、手のひらに涙を受けとめながら。

怒りも虚しさも、何ももたらしてはくれない。ただ折に触れては湧き上がり、炎のように身を焼いては去っていくだけだ。焦げて何も残らない。あらゆる娘は呪われている、きっと。

「かあさん」

背後から多喜ちゃんの、ごく小さなつぶやきが聞こえた。水滴がぽたぽたと新聞紙を打つ。それは多分サイダーではない。

直径五ミリもない、塩辛い水の玉が地面に落ちる音だ。

ハンドメイドお守り

<http://p.booklog.jp/book/79924>

著者：豆ヒヨコ

公式サイト：<http://mamehiyokoful.digi2.jp/>

二〇一三年八月十六日 発行 初版

表紙写真 MPF

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Taxus_wood.jpg

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79924>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79924>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ